

作物との対話

東京大学農学部教授 戸 莉 義 次

今日、「上農は草を見ずして草をとる」などという、抵抗を感じさせたり、阿呆らしいと笑われるだろう。それは、この言葉が持つ勤労精神鼓吹にカチンとくるからだと思う。勤労精神も、もっと高く評価されるべきものと信ずるが、それよりこの言葉の真髄は、「適期作業」の重要なことを教えていると考えるべきである。労少なくして功多き適期作業は、正に農作業の基本で、除草剤使用にあたって、播種前処理とか移植後1週間目処理というのと、少しも変わらない。昔の言葉を持ち出すと抵抗し、今の表現だと盲従する。真の意味、ものの本質を掴まない、うわすべりの行動は、実にコッケイである。

今どき、稲と語る篤農家といえは、古色蒼然たる頑固親父を連想する人が多い。確かに、篤農家のうちには自分の経験に固執して、他の意見を容れない人物もいたと思う。しかし、作物と話をすることは重要で、今までも、これからも、ますます作物との対話に力がいける筈であ

る。カミソリを持って田圃へ行き、稲株の根元を削って幼穂形成期を確認したり、粃数を調べて施肥量の多少を判定したりするのは、何れも作物との対話にはかならない。

稲と語ることの重要さは、昔も今も、また将来も変わらない。ただ、対話の方法が科学的になったというだけのことである。「はだして田圃へはいれ」「稲は足跡を欲しがっている」などの諺は、ゴム靴をはいて田にはいったのでは水温、地温はわからない。足跡の多いほどに田を見廻わって、稲の生育や環境条件を肌で感じとれという意味である。したがって、ゴム靴をはいていても、寒暖計で水温や地温を毎日調べるのが近代的ということになる。

わが国近代農業における最大の変化は、農民が技術者に成長したことである。日本農民は単なる技術者ではない。その農民の成長には、科学技術があずかって大きいが、同時に古老の至言の真意の古典的な、言い得て妙なるを忘れてはなるまい。

年 頭 の 辞

農林省農林水産技術会議事務局 調査官 仮 谷 桂

昨年来、産業界や金融界では大型併合が新聞、雑誌を賑わしている。強くて力のあるものが勝ち進んでいく以上、この傾向は自然の推移である。

原始産業の姿を残している農業においては、他の産業のように容易に併合、拡大ができないことはわかっているが、それでも今後の発展をとげるためには、当然規模の拡大が大切なこ